5つのしずく
～筑後川源流・水の冒険～

はじまり

九州の真ん中あたりに小さな雨雲が浮かんでいました。

「お母さん、明日は雨だって」

中津江村の森で、みんなでツリーハウスを作る会に参加しようと思っていたさわちゃんは、うらめしそうに空を眺めました。

空の上では、雲の家族が夕食後のお茶を飲んでいるところでした。

雲のお父さんは、5つ子のしずくたちに言いました。

「お前たちは、自分がどこから来たか知っているかな？」

「誰かが言ってた。水道の蛇口から来たって」

「海から来たんでしょ」

「雲から生まれたんだよ。お父さんとお母さんから…」

しずくたちは、知ったかぶりをして口々にこたえました。

雲のお父さんは、うなずきながら言いました。

「朝になったら、お前たちは雨になって旅をしてきなさい」

次の朝、5人はふかふかのベッドがゆっさゆっさと揺れるので目を覚ましました。雲のお父さんが、体を揺すっているのです。

5人は、とびおきて、寝ぼけまなこのままダイビングしました。

長男の、いちろうは、中津江村に

二番目の、じろうは、小国町に

三番目の、みよこは、上津江村に

四番目の、しろうは、天瀬町に

五番目の、ごろうは、大山町に

向かって降っていきました。

5つのしずくの、冒険のはじまりです。

★ツリーハウスづくり…下筌ダム湖畔にある「しもうけ館」が主催している「水と森のツーリズム」のイベントのひとつ。生えている木を利用してみんなで家を建てます。

その1　津江の森は歌う～いちろうの冒険～

しずくの長男、いちろうが降りたのは、中津江村の津江杉の森でした。さわやかないいにおいがして、色んな音が聞こえてきます。葉っぱの揺れる音、鳥の声、うり坊の鳴き声…。いちろうは、うれしくなって、1本の杉の木に話しかけました。

「こんにちは。あなたはそこで何をしているのですか？」

「はっはっはっ。おかしなことを聞くちびじゃのう…」

森の木たちは、いっせいに枝を揺すって大笑いしました。

木の上で寝ていた小鳥たちはびっくりして、いっせいにビーチク、ビー、ビーと鳴き始めました。そのきれいな声を伴奏にして、杉の木たちは歌い始めました。

空気を作るのは森。
炭酸ガスを吸い込んで、酸素を作る。
水を作るのは森。
雨を森にしみこませて、湧き水を作る。
地面を作るのは森。
しっかり根を張って、洪水を防ぐ。
生き物をまもるのは森。
たくさんのいのちが、森で生まれる。

大切なものは、みんな森の中。
なくしては、いけないものは
みんな森の中。

森はやさしく、いちろうを抱き、
いちろうは森にしみこんでいきました。
「おやすみ、そしていい旅を」
そんな声が、耳元で聞こえたような気がしました。

★津江杉…日本三大美林である日田杉の中でも、津江地方の杉を津江杉といいます。中津江村は、日田林業の発祥の地。宮園神社の杉が、日田杉の原木と言われています。

その2　恥ずかしがり屋の小国杉～じろうの冒険～

じろうは、杖立川沿いの製材所におりました。製材所は、森から切ってきた丸太を、木材にするところです。

じろうは、美しい小国杉の丸太に話しかけました。

「こんにちは、小国杉のおねえさん、あなたは、これからどうなるの？」

「柱になるか、床になるか、つくえやいすになるかもしれません。そうして、何百年も生き続けるんです」

「何百年も生きていられるのですか？」

「はい。私は水を吸ったり、はいたりして息をすることができるから、長く生きていられるんですよ。でも…」

小国杉は、うつむいたまま続けました。

「私、安いんです。外国から来る青い目の木材のほうが人気があって、仲間の中には、太陽の光も届かない荒れた森の中で一生を終えるものもいます。手入れしてもわりがあわないのですって」

小国杉の芯の部分はますます赤くなりました。

「それでも私は自信があります。私を柱や床や天井にして、土のかべと一緒に使えば、夏は涼しく、冬は暖かい、そして何百年も長持ちするすばらしい家が建ちます。毎日人と一緒に息をして、みんなの健康をまもることもできるのです」

じろうは、こんなに小国杉に思われている人間に、ちょっとやきもちをやきました。

「どうしてそんなに人につくすのですか？」

小国杉はにっこりして言いました。

「私を育ててくれたのは人間だからです。今も昔も、この小国の森や津江の森で、汗を流してはたらいて来た人々です。」

「さようなら小国杉さん。ぼくは旅を続けます」

じろうは、かわいい小国杉さんに別れを告げ、目の前の川に飛び込みました。

★小国杉…小国地方でとれる杉のことです。シックハウス症候群など、化学ぶっしつをふくむ材料で建てた家は、人の健康をそこなうことがあるのに対して、木造の家は、空気中の湿度を保ったり、快適な湿度にする効果があり、健康住宅として注目されています。小国町の第三セクターでも小国杉を使った住まいを作っています。

その3　きやどんの森～みよこの冒険～

「倒れるぞーーーーー」
顔を上げたとたん、みよこの目の前にドシンと、細長い杉の木が倒れてきました。
「おっと、ごめんよ。ただいま間伐中です」杉の木が言いました。
「かんばつ？何それ」
「木が大きく育つように、森の木を間引いて切り倒し、太陽の光があたるようにしてやることだよ。最近では、木材がお金にならないからって、やってもらえないことも多いんだけど。きやどんも歳をとった人が多いし、山を手放して街へ出ていってしまった人も多いんだ」
「きやどんって誰？」
「ぼくらを植えて、育てて、切り倒し、下流へ送り届けてくれる人たちのことさ。津江の言葉で、きやどん。って言うんだ」
「一服しようやー」
きやどんの声が森にこだましました。
すると、ゾロゾロと山へあがってくる大人や子どもたちがいます。
「ああ、今日はきやどん体験ツアーの日か」
杉の木が言いました。
「山の仕事のことや森の働きのことを、いろんな人に知ってもらうのも、森を守ることにつながるからね。こうして、最近は下流の町の人がやってくることもあるんだ」
ひとりのきやどんが、話しはじめました。
「戦後、焼け野原になっていた日本では、みんなが木の家を建てるようになり、木材がどんどん売れた時代がありました。その時に、杉や桧ばかりを植えすぎたという反省もあります。これからは広葉樹も植えていかねばなりません。しかし、杉の山も、手入れをきちんとすれば、水をたっぷりたくわえてくれます。水道の水を飲むときには、この山を思い出してください」
杉の木が倒れたあとには、青い空がのぞき、一筋のこもれ日がキラキラと差し込んでくるのでした。
ぼかぼかと気持ちよくて、みよこは夢見ごこちで森にしみこみました。

★きやどん体験ツアー…上津江村の、トライ・ウッドが行っている森林体験の催しです。なかなか見ることのできない山の仕事を見て、触れて、体験できます。下草刈り、木工体験、源流体験など、内容は季節によってさまざま。年数回行っています。

その4　バラが教えてくれたこと
～しろうの冒険～

しろうは、甘い花の香りの中で目覚めました。一輪のピンクのバラの上にあさつゆとなっておりたったようです。

「はじめまして。私はバラです。あまがせローズガーデンにようこそ」

「あなたはずっとここに咲いているのですか？ぼくと一緒にいきませんか？」

「私は、大地に根を張っているから、ここで生まれてここで死ぬのです。そして、土にかえるの」

しろうは、バラの言うことがよくわかりませんでした。

「花や植物、畑の野菜や田のお米…。すべて土から生まれてくるのよ。そして、その土が生まれたのは、あなたの生まれたところと同じよ」

「ぼくは蛇口から生まれました。そして雲になって、雨になりました」

「あなたが生まれたところは、森というところ。森は土を作るところでもあるの。土は、岩が長い年月をかけて砕けたものと、森の木の根や葉っぱや、動物たちの死体やふん、目に見えない小さな生き物たちが、腐っては積み重なったものからできているの。そして、あなたたち雨のしずくは森の土にたっぷりと吸い込まれ、地下水となり、ゆっくりと時間をかけて、わき水になる。わき水は川の流れとなって、畑や田んぼに入っていって、わたしたちを育てるの」

バラの声はだんだんかすれて、小さくなりました。

「私はもうすぐ、散ってゆくけど、あなたの役割を忘れないで」

バラは花びらを1枚、2枚と散らせていきました。

「バラさん、行かないで！」

「どこにも行かないわ。私はずっとあなたのそばにいる。目に見えるものだけを、信じてはだめ。森も、水も、花も、人も…。みんなひとつにつながっているのよ」

しろうは自分の流したたくさんの涙と一緒に、バラの花を伝って、土にしみこんでいきました。

★あまがせローズガーデン…天瀬町のふれあい農園、クラインガルテンあまがせの隣にあるバラ園です。130種、1700株ものバラが見られます。

その5　アユは知っていた～ごろうの冒険～

ごろうは、たくさんのしずくの仲間たちといっしょに、川となって、流れていました。だんだん流れが速くなっています。もうすぐ響渓谷のようです。その時、1匹のアユが、ごろうの前に現れました。

「アユさん、どこから来たの？」

「ここのもっと下流のほうだよ。三隈川で放流されて、登ってきたんだ」

「川の流れに逆らって、たいへんじゃない？」

「そんなこと言ったって、オレの父さんも、母さんも、じいちゃんも、ひいじいちゃんもみんなそうしてきたんだ。オレのじいちゃんはね、ヒビキアユって言われたすごいアユなんだよ。全長30センチ、重さは600グラムもあったのさ。昔の川は、ドンコやアカザやヨシノボリも今よりもっともっといて、子どもも大人も川で泳いでた。森から切り出された木だって川に流して運んでいたんだよ」

「でも、今は流れが小さい…。水が少ない。どうしたら、私はきれいになるの？汚れずにすむの？大きな流れを保てるの？」

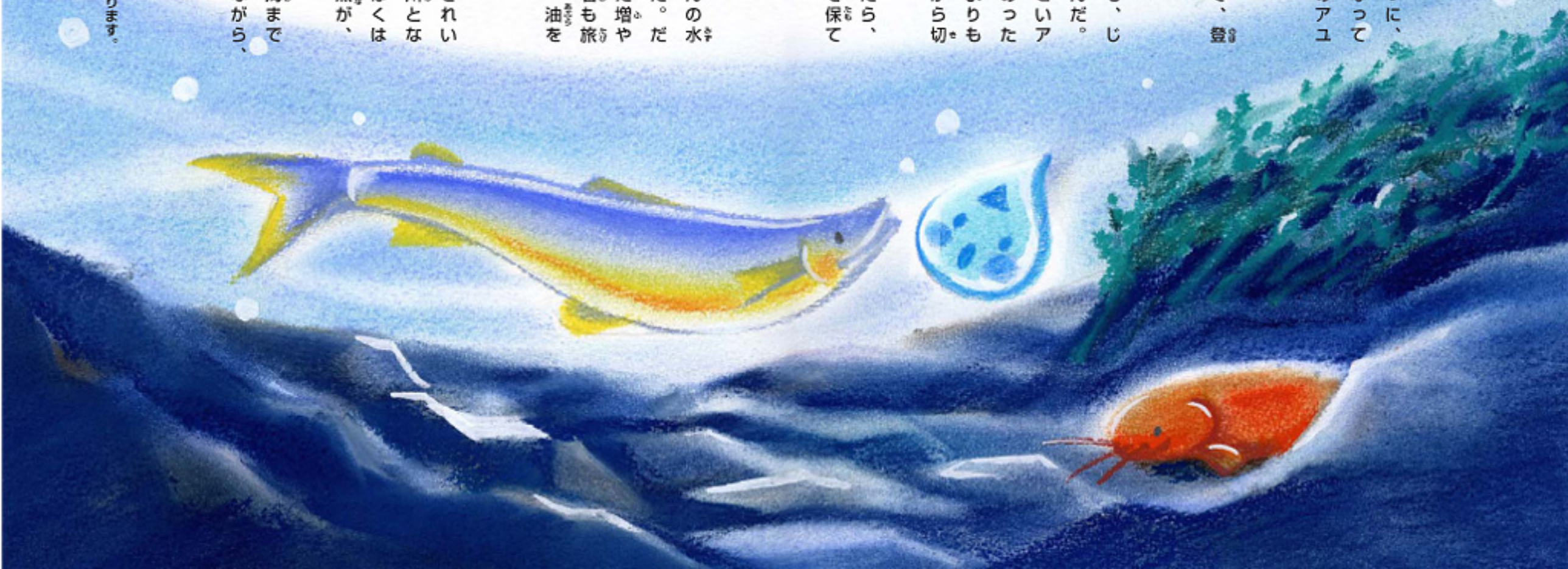
「以前、水の力で電気を作るために、川からたくさんの水をとって、川の流れが止まってしまったことがあった。だけど流域の人々がみんなで運動をして、水の量をまた増やしてくれた。だから、オレは今、生きていられる。君も旅の途中で、みんなに伝えて。合成洗剤を使わないで。油を流さないで。そして水を大切に使ってって」

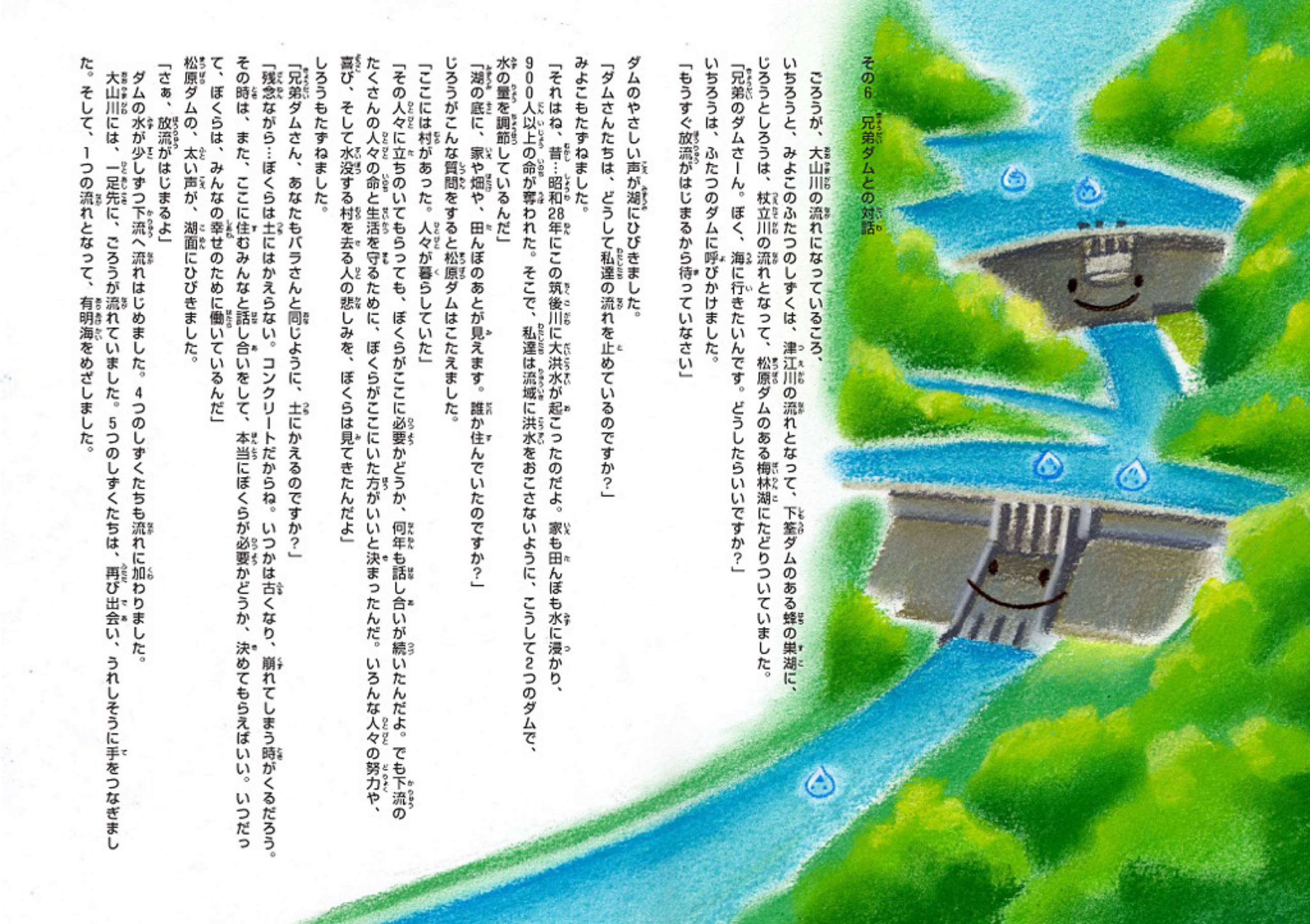
そばで話を聞いていたアカザも、続けて言いました。

「そして、森に来て、木を植えてくれって。森は、きれいな水をたくさん作ってくれる。そして、その水は、川となって、平野におり、まちをぬけて海まで行くんだ。ぼくは海を知らないけれど、海にはぼくらと同じようなな魚が、たくさんたくさんいるんだって」

森にしみこみ、たくわえられた水が、川となって、海まで行く。ぼくは海に行くんだ…。しろうはドキドキしながら、再び流れに加わりました。

★響渓谷…大山町を流れる大山川にある渓谷です。秋の紅葉の名所でもあります。





その6　兄弟ダムとの対話

ごろうが、大山川の流れになっているころ、いちろうと、みよこのふたつのしずくは、津江川の流れとなって、下筌ダムのある蜂の巣湖に、じろうとしろうは、杖立川の流れとなって、松原ダムのある梅林湖にたどりついていました。

「兄弟のダムさーん。ぼく、海に行きたいんです。どうしたらいいですか？」

いちろうは、ふたつのダムに呼びかけました。

「もうすぐ放流がはじまるから待っていなさい」

ダムのやさしい声が湖にひびきました。

「ダムさんたちは、どうして私達の流れを止めているのですか？」

みよこもたずねました。

「それはね、昔…昭和28年にこの筑後川に大洪水が起こったのだよ。家も田んぼも水に浸かり、900人以上の命が奪われた。そこで、私達は流域に洪水をおこさないように、こうして2つのダムで、水の量を調節しているんだ」

「湖の底に、家や畑や、田んぼのあとが見えます。誰か住んでいたのですか？」

じろうがこんな質問をすると松原ダムはこたえました。

「ここには村があった。人々が暮らしていた」

「その人々に立ちのいてもらっても、ぼくらがここに必要かどうか、何年も話し合いが続いたんだよ。でも下流のたくさんの人々の命と生活を守るために、ぼくらがここにいた方がいいと決まったんだ。いろんな人々の努力や、喜び、そして水没する村を去る人の悲しみを、ぼくらは見てきたんだよ」

しろうもたずねました。

「兄弟ダムさん、あなたもバラさんと同じように、土にかえるのですか？」

「残念ながら…ぼくらは土にはかえらない。コンクリートだからね。いつかは古くなり、崩れてしまう時がくるだろう。その時は、また、ここに住むみんなと話し合いをして、本当にぼくらが必要かどうか、決めてもらえばいい。いつだって、ぼくらは、みんなの幸せのために働いているんだ」

松原ダムの、太い声が、湖面にひびきました。

「さあ、放流がはじまるよ」

ダムの水が少しずつ下流へ流れはじめました。4つのしずくたちも流れに加わりました。

大山川には、一足先に、ごろうが流れていました。5つのしずくたちは、再び出会い、うれしそうに手をつなぎました。そして、1つの流れとなって、有明海をめざしました。

その7　海へ、空へ、森へ

ぼくは筑後川。名前を筑紫次郎といいます。
今、ぼくの流れの中には、5つのしずくが
含まれていて一緒に旅をしています。
ぼくらは、森で生まれて、
川となり、海へ注ぐまでの間に
木を育て、作物を育て、
鳥や魚や動物たちを育み
人のいのちを支えています。
ぼくらの運ぶ、土や栄養分が
有明海の命を支えています。
コップに一杯の水を飲むとき、
5つのしずくのたどった冒険を
思い出してみてください。
津江の森や、小国の杉、山を守るきやどんや、
天瀬のバラ、大山のアユ、そして、兄弟ダムのことも。
そろそろ海につきます。
夕なぎの海に雲のすき間から、光の階段がおりてくるとき
5つのしずくたちは、
お父さん、お母さんのところへかえるのでしょう。
そして、今日も森の中では、
生まれたばかりのしずくたちが
ゆっくりと、旅のしたくをはじめています。

発　行
松原・下筌ダム水源地域ビジョン実践センター事務局
筑後川ダム統合管理事務所
久留米市高野町1丁目2番2号　TEL(0942)39-6651(代)